彼女に『奴隷ごっこ』をお願いしたら本当の奴隷にされたお話

目次

第一章　奴隷ごっこ……2

第二章　もう逆らえないね……16

第三章　筆おろしと生殺し**エラー! ブックマークが定義されていません。**

第四章　ただの男の子**エラー! ブックマークが定義されていません。**

第五章　ルーインド・ゲーム**エラー! ブックマークが定義されていません。**

第一章　奴隷ごっこ

『セックスって男の人のためのものになりすぎてるんですよ』

小さな画面の中で派手な格好をした女が熱っぽく語りかける。

『うまくいかないカップルって結局はセックスに問題があることが多いんです。特に男性が自分本位になっているパターンが多いんですね。するタイミングも内容も男の人の気分に次第で、女の子の気持ちが蔑ろにされてる。それがきっかけで関係が悪くなって、破局までつながるんです。だからアタシはそういう現状を変えるために、恋人同士でＳＭプレイをすることをおすすめしてるんです。

ただＳＭっていっても鞭でバシバシ叩くってわけじゃないですよ。あくまでごっこ遊び。奴隷ごっこです。

女性がご主人様で、男性がその奴隷になってください。

主人とか奴隷とかっていうと警戒しちゃうかもしれませんけど、別にハードなことをする必要はないんですよ。ただ一度相手より低い立場になったつもりで、彼女さんに尽くしてみてほしいんです。期間を決めたり、週末だけと決めてもいいと思います。騙されたと思ってやってみてください。この奴隷ごっこによって見えてくるものが絶対にありますから。具体的には、この』

具体的には何なのか、続きを聞くことはできなかった。千佳が動画の再生を止めたからだ。

「奴隷ごっこだって」

無邪気な笑い声を上げながら千佳が肩を揺らした。「この動画やばいね」

部屋の電気はすでに消えている。狭いベッドの中で桃弥（とうや）は毛布にくるまり、うつ伏せになって桃弥のスマホを弄っている千佳の姿を横から眺めていた。

情事に入る直前のことだったから二人とも裸で、千佳の白い肌は暗がりの中でスマホの画面に負けないほど白く輝いて見えた。

「この人って元ＳＭ嬢なんだよね」スマホをベッドの脇に転がしながら千佳は体を捻って桃弥の腕にしがみつく。

「新感覚恋愛アドバイザーＨＡＲＵＭＩ。わたしも聞いたことあるけど、どちらかというと女の子向けだと思ってた。モモくんもこういうの見るんだね」

「別にいつも見てるわけじゃないけど」

居心地悪く感じながら桃弥は釈明する。「色々見てたらたまたまおすすめに流れて来たんだよ。最初はもうちょっと真面目な恋愛相談だったんだけど」

「何か悩んでるの？」

「いや、千佳と付き合う前のことだよ。どうやって誘ったらいいかとか参考してたから」

「ほんとかな？」

疑わしそうに千佳は顔を覗き込んでくる。桃弥はどきりとして思わず千佳から目を逸らした。

桃弥が千佳と付き合い始めて半年になる。

二人は同じ大学に通っているが学科は別で、出会ったのは共通の知り合いを通しての合コンだった。

ふんわりとしたウェーブのかかった黒髪に、笑うとえくぼのできる柔らかそうな頬。小柄で、ぽっちりとした瞳は小動物っぽい雰囲気を与える。

体と同じように乳房も小ぶりだからグラマラスというタイプではない。でも少女っぽい雰囲気を残しているところも、桃弥のことを「モモくん」と呼ぶところも、守ってあげたくなる感じがして好きだった。

それにセックスアピールに溢れたタイプでないのは桃弥にしても同じだった。子供のころからずっと痩せっぽちで、体毛も薄く、筋肉もそれほど目立たない。

ベッドの上で裸になっていてもなお、少年と少女という雰囲気は拭えず、二人の間にはまるで性差なんてないみたいだった。桃弥の股間で硬く勃起し、存在を主張しているそれを除けば。

「さっきからそこ、苦しそうだね」
否定の言葉を紡ごうとしていると、ふいに千佳は桃弥の下半身に目をやり、足元のほうに移動する。陰茎に指を絡めると、慣れた手つきで上下に扱いた。すぐに股間から広がるぬるま湯のような快楽が広がっていく。
心地よさに呻きながら桃弥も千佳の体に手を伸ばそうとする。だが、体を起こして千佳の胸を揉もうとする前に、千佳は添い寝をするような恰好で桃弥の脇腹の辺りに抱き着いてきた。胸板に柔らかな胸が押し当てられ、その感触にぼうっとしていると千佳は桃弥の乳首に顔を近づけ、舌先でちろちろと乳首の先端を舐めた。
別軸の快感が脳を犯す。
二重奏になった刺激に、桃弥はたまらず体をのけ反らせて呻いた。どうにか反撃を試みるが、襲ってくる二重の快感の波に脳が麻痺したようになる。されるがまま口から「くっ」と思わず声が漏れてしまい、胸板の上で乳首を舐める千佳がにやりと笑うのが視界に映った。
乳首責めを伴った手コキ。
それは二人が付き合うより前に千佳が身に着けていたテクニックだった。
千佳と付き合うまで桃弥は童貞だった。でも彼女のほうは大学に

入学してから一年ほど付き合った年上の彼氏がいたらしい。桃弥は千佳にとって二人目の恋人だった。

こうやって千佳から一方的に責められていると、性経験の差をまざまざと見せつけられるようで、桃弥はたまらなく千佳に屈服するような気持ちになる。そしてその屈辱感がさらなる快感を呼ぶ。

湧き上がって来る衝動が致命的なものにならないよう腰に力を入れるけど、臨界点はもうすぐそこに迫っていた。

「千佳」

「なあに？」

「もう出ちゃいそう」

あっけなく桃弥が降伏を宣言すると、千佳は満足そうに息を漏らし、手の動きを止めた。

「モモくんって、これやるとすぐだよね。乳首、弱いんだ」

「しょうがないだろう。だって」

こんなの気持ちよすぎるから。

その先の言葉はどうにか飲み込む。

「どうしたの？」

「なんでもないよ」

口を尖らせて腕で顔を覆う桃弥を、千佳はけらけらと茶化すように笑いながら、再び陰茎に指を絡めた。先ほどまでの扱き上げる動

きではない。指先で亀頭の先を嬲るようにして絡めたり、撫でたりする。

決して絶頂を迎えることのない緩慢な愛撫。どこまで自覚的なのか、桃弥は逃れられない快楽責めを味わっているようだった。

『……ＳＭプレイなんていきなりできないよって言う人も多いと思うんですね』

そのとき、ふいに先ほどの動画が流れた。枕元に放って置かれたスマホの画面を桃弥が肘でタップしてしまったらしい。

「でも無理に特別なことをしなくていいんです。初心者さんたちは一つだけルールを守ってくれればいいんです。それはですね、えっちは彼女の許可がなくちゃしてはいけない、というものです」

少々過激な内容に、二人とも思わず耳を傾ける。

『もちろんえっちは双方の合意がないとできないことですよ。でもそれを彼女のお許しがないとできないってことをあえて明文化するんです。彼氏の皆さんはもちろん彼女とえっちなことしたいですよね？　そうするとどうなるかというと、彼女さんの機嫌を取ろうとあれこれ尽くそうとするんですよ。今日は疲れてるんじゃないかなとか、こんなプレゼントしたら喜んでくれるかなとか、色々気遣うんです。もちろん彼女さんが積極的にお願いをしてもいいんですよ。部屋の掃除やマッサージを頼んでみるとか。彼氏はもちろん断れな

いと思いますから、ぜひやってみてください』

動画が終了してコマーシャルが流れる。千佳は空いたほうの手でスマホの再生を止め、今度はベッド脇まで手を伸ばしてちゃぶ台にそれをよけた。

「もしかしたらだけどさ、モモくんもこういうの実際にやってみたいと思ってるんじゃないの」

再び毛布の中に潜り込んでくると、脇腹に抱き着いて体を密着させながら桃弥の顔を見上げた。

「女の子の奴隷にされて虐められちゃうの。焦らされたり、弄ばれたりしたいと思ってるんじゃない？」

奴隷。

その単語に羞恥を感じながら、しかし否定することもできない。

おずおずと桃弥は肯いた。

「まあ、ちょっとくらいは」

「やっぱりそうなんだ」

ごそごそと毛布の中を動き、桃弥の顔のすぐ側に顔を近づけながらにやにやした顔で桃弥の頬を指で突く。

「モモくんってちょっとマゾっぽいところあるよね。わたしに責められてるとき嬉しそうだし」

「嬉しいっていうか、それは普通に気持ちいいから」

「でもエスっぽい人って女の子に主導権握られるの嫌がらない？」

「そうかもだけど、でも真面目な話、千佳に無理させてないかなって気になるよ。千佳とのことはちゃんとしたいっていうか」

「わたしはモモくんに不満なんかないけど」

少々困惑したふうに千佳は首をかしげる。「急にそんな話してどうしたの。何かあった？」

質問を返され、桃弥は言葉に窮した。

そもそも恋愛アドバイス系の動画を漁るようになったきっかけは千佳のラインにあった。先週千佳からスマホを借りたとき、間違っての履歴を覗いてしまったことがあったのだ。すぐに閉じようとしたが、偶然開いたチャット欄に桃弥は目を奪われた。

『久しぶり。いきなりで悪いんだけど、近いうちに会えないかな。千佳の好きなシーフードレストランを教えて貰ったから、いっしょに行けたら嬉しいな。連絡待ってます』

食事を誘っているアカウントの名前に桃弥は見覚えがあった。千佳の元カレの名前だった。

続きの会話で、千佳はその誘いをやんわり断っていた。

そのことには胸を撫で下ろしたが、また元カレからの誘いがあるかもしれない。あるいは千佳と懇意になりたい人間がほかに現れても不思議ではない。不安はしこりとなって胸に残り続けた。

だが嫉妬をあけすけに話すこともできず、桃弥は曖昧に話題を変えた。

「この人の言うことがどこまで信用できるかわからないけどさ、セックスが男の都合で動いてるっていうのも、ちょっと耳が痛いっていうか。千佳にもっと喜んで貰えるならそういうのもいいかなと思っただけだよ」

「それはわたしだって尽くして貰えるのは嬉しいけど」

体に毛布をかけ、その中で抱き合うと、千佳は独り言のように呟いた。

「別にえっちのことだけじゃなくてね、一生懸命デートのプラン考えてくれるとか、雨の日に駅まで迎えに来てくれるとか。愛されてるんだなって実感あると満たされて、幸せに感じるのは確かだよ」

「うん」

「だから嫌ってわけじゃないんだけどさ、モモくんはいいの？　奴隷になったら、えっちするのにわたしの言うこと聞かないといけなくなるんだよ。男の子にとってそういうの屈辱なんじゃない？」

「僕は千佳のためならなんだってするけど」

「うわあ」

毛布の中で堪え切れなくなったように千佳は脚をばたばたと動かす。「やっぱりマゾなんだね、そういうの好きなんだ」

「だからそういうんじゃ」
「モモくんがいいなら、わたしはやってあげてもいいけど」
ふいに千佳は見透かすような目を向ける。その視線に囚われて、
桃弥は軽く眩暈を覚えた。
ＨＡＲＵＭＩの言葉を信じて千佳との関係をより良いものにする
ためなのか。あるいはもっと別の欲求に突き動かされているのか。
心臓がばくばくする。このときほど緊張した経験は、今までの人
生で一度も覚えがなかった。
「あのさ、千佳」
「なに？」
「ご主人様になってください。つまり、ごっこ遊びでだけど」
どうにかそう口にすると、堪え切れなくなったように千佳は吹き
出した。
「モモくんかわいい〜。ご主人様になってだってだって」
「……茶化さないでよ」
「だって、必死なんだもん。顔真っ赤だし」
毛布をくしゃくしゃに抱きしめながら千佳は笑い転げていたが、
やがて呼吸を整えながらにやついた顔で言った。
「いいよ。それじゃあモモくんは今日からわたしの奴隷だね」
奴隷。

そんな単語が千佳の口から出て来たことにまた胸がとくんと跳ねた。何か引き返せない扉を開けてしまった気がしたが、すでに引き返したいとも思っていなかった。
彼女の奴隷になった。
もちろん『奴隷ごっこ』ではあるのだけど、桃弥は長い間恋焦がれていた黄金郷にたどり着いたような高揚感で満たされていた。
「ちなみにこのルールはいつから有効にしたらいいかな。えっちするのにわたしの言うこと聞かないといけないっていうの。今日はもう我慢できなさそうだけど」
千佳はそう尋ねながら、桃弥の股間にちらりと視線を向けた。陰毛の茂りの中で、桃弥の陰茎が痛いほどに勃起していた。
できることならすぐに千佳の中に硬くなったそれを押し込み、射精したい。男の本能が折り曲げられた千佳の脚の付け根へと視線を向けさせる。陰毛の下の妖しい秘部へと。
「今日からにしよう」
桃弥は薄暗い部屋の中で誰に聞かせるわけでもなくはっきり言った。「まだちゃんとルールの詳細は決めてないけど、千佳の言うことはちゃんと聞くからさ。何でも命令してよ」
「いきなりそんなこと言われても困るけど」
苦笑してから、千佳はふと思いついたように言った。「じゃあさ、

モモくん一人でやってみてよ」
「一人って、オナニーしろってこと？」
「だってわたし、男の子が一人でしてるところ見たことないし。モモくんのしてるところならかわいいかなって」
「別にかわいくはないと思うけど」
そう桃弥は呟いたが、自慰を見られる光景を想像して背徳的な興奮を覚えた。躊躇っているふりをしながら、千佳の前で脚を伸ばし、勃起した陰茎をつかんだ。
「本当にしちゃうんだ」
千佳は悲鳴にも似た声を上げたが、目線は桃弥の股間に注がれたままだった。指で輪を作った手が上下に動くのを、風変りな生き物を観察するようにじっと眺めている。
「ねえねえ、いつもそうやってるの？　一人でするとき。シコシコって」
「そうだよ」
「面白いね。男の子のオナニー」
女の子座りの恰好でシーツに手を突くと、千佳は前かがみになって桃弥の手元をよく観ようとした。。
「自分でするときはけっこう速く動かすんだね」
「そうかも」

「普段はさっきのＡＶ見ながらしてるんだよね」
「千佳のこと考えながらするほうが多いよ」
「そんなこと言われても嬉しくないけどさ」
千佳は呆れたように言ったが、満更ではなかったらしい。躊躇うような素振りを見せた後、ベッドの上で膝立ちになり、体を反らしながら顔の横を両手でつかんで頭の後ろに流した。
両手を顔の横に持って来るポーズで、暗がりの中に千佳の裸体が強調される。
小ぶりだが張りのある乳房、つんと上を向いた乳首、白い肌、誘惑するような腰つき、のけ反ったときに前に突き出される平らな腹と臍の下の黒い茂み。
付き合う前、幾度となく想像して自慰に耽った恋人の裸体が目の前にあった。それもグラビアのような悩殺ポーズだ。無意識のうちに陰茎を扱く手が速くなった。
「わかりやすいね、モモくんは」
その反応を目ざとく見つけた千佳は胸を隠すように腕を体の前で交差させた。
「なんか必死になってる。でもそうやってると、なんだかモモくんも男の子って感じがするね」
男の子。

そうだと桃弥は思った。自分は男で千佳は女の子なのだ。

致命的に駆け昇ってくる射精衝動に飲み込まれながら桃弥は確信した。

対等なカップルだなんていう建前はまやかしのように思える。

蠱惑的にほほ笑む千佳と、先端からだらだらと我慢汁を垂らし、陰茎を懸命にしごいている桃弥。

美しい彼女と醜い彼氏。

女と男。

自らの陰茎を扱き、絶頂を目前に迎えながら、桃弥はこれから先一生千佳には頭が上がらないのではないかという、そんな予感を抱いた。

第二章　もう逆らえないね

「そんなの簡単だよ。もうえっちしてあげないからって言えばいいんだから」

いつだったか女子だけの飲み会で、同じ学科の子がそう話すのを聞いたことがあった。

話題は彼氏と喧嘩になったときの対処方法だった。

「そりゃあ喧嘩の直後は偉そうなこと言うよ。俺のこと馬鹿にするなとかなんとか。でも怒りがいったん落ち着いてその気になると、結局こっちの機嫌取ろうとしてくるんだよね。ほんと男って下半身の奴隷なんだよ」

お酒がずいぶん回っていたからかもしれない。下世話な話が出がちな女子会の場とはいえ、さすがにみんな苦笑いを浮かべるばかりで何となく居心地の悪い空気が流れた。千佳も密かにこの子とは距離を取ろうと決意したくらいだ。

でも同時に、千佳はその子がとても自由であるように感じられた。世間に気兼ねせず、人生を謳歌している。自分の持てる能力を如何なく発揮している。

それに比べて彼女に引いていた周りの女の子たちは、千佳自身も含めて、何かに遠慮してあえて力を発揮しないようにしているようだった。ヒジャーブで顔を隠すイスラムの女性たちみたいに。

相手の行為を利用し、足元を見て都合のいいように扱う。ときには自分の体すら男を操るための餌として使い、恋人意外の男とも平気でデートをして、異性の歓心を集め、プレゼントを貢がせたり便宜を図って貰ったりする、小悪魔とかコケティッシュとかも呼ばれる存在。

得てしてその手の女が同性からの評判が著しく悪いのは、単なる嫉妬なのかもしれないと思うときがあった。

彼女たちは手段を選ばないがゆえに、常に欲しいものを手に入れている。女という武器を優雅に使いこなす自由な彼女たちに、千佳もまた同じことをしてみたいと心の底で感じていた。

『主従関係締結契約書

性行為の決定権について

性行為を行うか否かの決定権は全面的に主人に帰属する。

許可の取り消しについて

主人は一度承諾した性行為の許可について、行為の前、行為中にかかわらず、いつでも許可を取り消すことができる。行為中に主人が許可を取り消した場合、奴隷は速やかに行為を中断し、主人の指

示に従わなければならない。